



ドイツ・フランクフルトに暮らして

元ドイツ・フランクフルト日本人国際学校教諭
浜松市立湖東中学校 鈴木孝昭



メイン川の対岸から旧市街を臨む

1. ドイツ経済の中心都市フランクフルト

フランクフルトは、正式な名称をFrankfurt am Mainといい、「メイン川のほとりにあるフランクフルト(フランク人の浅瀬)」という意味である。人口約65万、ドイツ経済の中心都市で、ドイツ連邦銀行、ヨーロッパ中央銀行がおかれていることでも知られている。中心部に多くの高層ビルが建ち並ぶ近代都市である。ドイツ国内では、街並みの景観を重視することから、建物の高さ制限があるそうで、他の街に行っても教会よりも高い建物はまず見かけない。そういう意味で首都ベルリンとこのフランクフルトは、ドイツの中で異質の都市であるといってもよい。その一方で歴史も古く、大聖堂など中世の面影を残す建築物も多く見られ、古い面と新しい面の両方をあわせ持つ街といえる。

また、フランクフルトには移民も多く、4人に1人は外国人といわれている。とくに、トルコ人と東欧系(旧ユーゴ、ポーランドなど)が多いが、黒人やアジア系もよく見かける。それだけ移民が多いので、レストランも多国籍で、ここではほとんどの国の料理が食べられる。

2. ドイツと日本の生活の違いは？

ドイツでは、キリスト教の安息日である日曜日にはお店が全て休みになり、平日でも午後8時には閉店になってしまう。(現在は一部のデパート・スーパーで午後10時まで営業)日本のような24時間営業のコンビニもない。そういう点で最初は不便に感じることもあ

ったが、これも慣れてしまえば問題はない。3年間生活してみて、ドイツ人は親日的であり、とても暮らしやすい街だと感じた。やはり、「郷に入ったら、郷に従え」ということであろう。その他にも、日本の生活と違うおもな点を以下にあげてみた。



市の中心部にある高層ビル群

・デポジット制度

ビンや缶はもちろん、ペットボトルに至るまで、プファンドというという価格(25~30セント程度=40~50円)が上乘せられて売られており、返すとその分が返金されるので、リサイクル効率がよく、ポイ捨てがほとんどない。

・レジ袋がない！

スーパーで買ったものは、自分で持参した袋に入れて持ち帰る。レジ袋は有料で売っているが、ほとんど買う人はいない。最近では、日本でもエコバッグを持つ人が増えているようだ。

・ゴミの分別

ゴミ置き場には色別の箱、①黒:最終廃棄ゴミ、②緑:古紙、③黄:資源ゴミ(プラスチックなど)、④茶:有機系ゴミ(生ゴミなど)が置いてあり、それぞれに分別して出す。黒いゴミ箱の量だけ有料なので、なるべくゴミを減らす努力をしている。教室にも必ずゴミ箱が二つ置いてあり、ゴミ用と古紙用に分かれている。

・駅に改札がない！

Uバーン(地下鉄)やバスに乗るときは改札がなく、

切符を買って乗車する。検札は、不定期に回ってくるというしくみなので、不正乗車ができてしまいそうだが、不所持の場合は40ユーロ(約6000円)の罰金を取られるので、しっかり買っている人が多い。

・アウトバーン (高速道路)

ドイツは平地が多いため、アウトバーンが網の目のように走っており、基本的に無料で速度制限がない(制限ありの区間もある)ので、車による移動は大変便利である。

・音が静か!

ドイツ人は世界でも音に対して最も敏感だといわれており、夜は10時以降には入浴もしてはならないようになっていっている。また、安息日である日曜日の昼間13時～15時も静かにしなければならない時間帯で、芝刈りや子どもが遊んで騒いでもいけない。



日本人学校と現地校との交流

3. ドイツの学校制度

ドイツでは、義務教育が12年間(13年のコースもある)で、日本の小学校にあたるグランド・シューレは4年間である。そのあとは、大まかにいうとギムナジウム(大学進学コース)・実科学校(専門コース)・本科学校(就職コース)という三つの学校に分かれ、それぞれに進学していく。そうすると、日本のようにとりあえず高校へ行って…などとのんびり構えていられないのだ。つまり、小学校4年生で自分の将来の人生を決める進学先を決めなければならないわけで、これは自分の将来を決めるのには早すぎると感じた。その他に、日本の学校と違う点をいくつかあげてみた。

- ・気温が朝7時30分に25度を超えていると休校になる(日本なら夏は休校だらけかも…)。
- ・授業は朝7時30分～13時までで、給食はなく、昼食は帰宅してから食べる。その後は、クラブチームな

どの社会体育に参加する。教員もだいたい14時頃帰り、あとは家庭教師などのアルバイトをしているそうである。(ドイツでは公立学校教員の副業が認められている)

- ・ドイツには日本の文部科学省にあたるものはなく、州ごとに教育局(教育委員会にあたるもの)が設置されているため、学校の制度については、それぞれの州ごとに決められている。

4. 過去と向き合うドイツ ～負の遺産～



アンネが4歳まで暮らした家

私の住まいのすぐ近くに「Anne-Frank strasse」という通りがあり、あのアンネ・フランクが4歳まで暮らした家が現在も残っていた。そしてアンネが亡くなったベルゲンベルゼン強制収容所跡(北ドイツ)も残されており、私も訪れたことがある。ドイツ国内には、このような第二次世界大戦時につくられた負の遺産が数多く残され、きちんと保存されている。もちろん観光客が好んで行くところではないが、どの施設でも見学しているドイツ人が何かしゃべるのでもなく、静かにじっと展示物を見ている光景が忘れられない。これらはヒトラーによるナチス第三帝国時代のものであるが、おもに国によって管理されており、無料で開放され、来訪者は国籍を問わず誰でも見学できる。このことは、ドイツという国が「くさいものには蓋」をして過去のことを忘れ去ろうとするのではなく、真摯に自らの過去と向き合おうとしていることを如実に示している。過去に行われたユダヤ人大量虐殺に代表される数々の忌まわしいできごと、自らの同胞が犯した過ちなどを、戦後60年以上経った今なおこのように保存し、それを後世に伝えようとしているのである。あのような過ちを、次の世代に二度と繰り返させてはならないという、強い意志がここに表れている。